

イメージ発想に関する研究(2)

田 川 典 子

I. はじめに

創造活動の一環である舞踊学習の場で、本学学生にみるイメージ発想の稀薄さを痛感したことから、イメージ発想に関する研究1として、イメージとは何か、想像力との相違を文献に基づいて再考した上で、本学学生の幼児体験調査を実施し、その傾向を抽出、報告した。

前回の調査結果から、多数の学生は、幼児期の傾向として、情動面に於いては比較的外向的で、行動力に富むことがうかがえる反面、初歩的芸術体験(稽古事などによるもの)があるにもかかわらず、作文、作曲、工芸などはあまり好まれない傾向がみられ、総体的に創造的指向が少ないと考えられた。創造の前提としては、他の要因もあろうが、イメージや想像力は不可欠のものと考えられる。この場合のイメージとは「過去の体験の中でその実物についてつくられている心象¹⁾」であり、想像は「現実の知覚に与えられていない物事の心象(イメージ)を心に浮かべたり、過去の経験を再生したり、また過去の経験を組み合わせて新しい心象をつくり出す」場合のことである。

このことはイメージ操作の時間経過をもつことを示し、想像力は外界の刺激を多様に受けとめる感受性と、それに基づいて論理的に思考する力の相乗作用と解される。それ故、その力の有無は創造に大きく関連するものであることがわかる。つまり、豊かな感受性と思考の柔軟性が創造力を増大させる基盤と思われるのである。

そこで、前回の被験者個々の創造力の基盤をさらに把握する資料を得るために、TK式向性検査第Ⅱ形式(VAT)とTK式思考力診断検査を実施した。

今回は、その資料から得られた傾向を継続研究2として報告する。

II. TK式向性検査の結果

1. TK式向性検査第二形式について

VATの手引きによれば、この検査は個人のパーソナリティを向性という面を中心に多面的、診断的に捉えようとするものである。また、個人がいろいろの行動的、思考的場面でどのような反応をし、判断し、自我充足をしようとするか、また自他の関係を認識し、調整するか、どのようなしかたで適応しようとするかについて診断し、指導するための資料を得るものとされる。

人間の行動や判断を決定する基礎には、一般的な心的エネルギーの総体ないしは一種の生命力ともいべきリビドー(libido)と呼ばれるものがあり、そのエネルギーの向かう方向によ

り各人のパーソナリティ特性が定まるとされる。(ユングの向性概念)判断や行動の手がかりに外部の刺激や規範を求める傾向の人を外向型と呼び、このタイプの人は情緒の表出が活発で開放的であり、他人との交渉を好み、協調とか統率にすぐれているとされ、一方リビドーが内面に向かい、判断や行動に際して自己を規準とし、自己に関心を集中する傾向の人を内向型としている。つまり、内気、ひかえ目、反省的などの特徴をもつ。

検査の構成は、社会的向性尺度、思考的向性尺度、劣等感尺度、神経質尺度、感情的向性尺度という5種の尺度があり、それぞれの因子特性として、社会的内向-社会的外向、思考的内考-思考的外向、劣等感-優越感、神経質-のんき・粗雑さ、感情安定性-感情変易性の5つの側面からパーソナリティを推定するよう考えられている。

社会的向性尺度は、社会生活や行動場面において、各個人の心的エネルギーがどの方向に現われるかということで、現象的・表面的に観察し易い傾向で、見かけ上のパーソナリティといえる。自己診断と他人診断がもっとも一致しやすい尺度とされる。

思考的内向性尺度は、考え方の上での向性を測るもので、表面的な行動と判断・思考のタイプが一致する人も多いが、見かけ上のパーソナリティは必ずしも本人の内面生活を反映していない。外見は外向的で積極的で決断力に富むが、行動について深く考えこんだり、判断の基準を自分本位にしか考えられない人もいる。

劣等感尺度は、自己評価に於ける劣等感・無力感・失敗感と優越感・充実感・成就感とが対比させてある。

神経質尺度は、細かい点にまで気を配り、几帳面であるかどうかをみる検査である。

感情安定性尺度は、人間のパーソナリティ構造のうちでも、かなり深層部と関連しているとされ、感情の変わり易さはパーソナリティ理解の上で重要な因子をなしている。一般に内向性の方は静かで落ち着きがあり、慎重で持久性があると考えられている。それぞれの因子特性については今回は省く。

2. 検査集計と結果

a. 個人得点の集計は一覧表の通りである(資料I参照)。検査有効数69名で、5種の尺度から5つの特性因子、社会的内・外向をテストI、思考的内・外向をテストII、劣等感・優越感をテストIII、神経質・のんき・粗雑さをテストIV、感情安定性・変易性をテストVとし、テストI+IIの合計は一般的内・外向性をみるものである。

b. 次に資料Iに基づいて、VAT診断プロフィールを作成した。なお、個人プロフィールの資料は割愛する。ここで、全体の傾向をみるために、便宜上、一般的内・外向性の(粗点I+IIの合計)得点別に20点台、30点台、40点台、50点台、60点台と分け、それぞれの人数を集計し、資料IIにまとめた。

c. 資料IIにより、20点台7名、30点台10名、40点台19名、50点台23名、60点台10名のVAT診断プロフィールを1枚の用紙に記載したものが資料III-1~III-5である。

d. 5つの因子特性による7段階評価の人数の分布を明らかにするため、一覧表を作成、資料IVとした。

資料 I 粗点集計一覧表

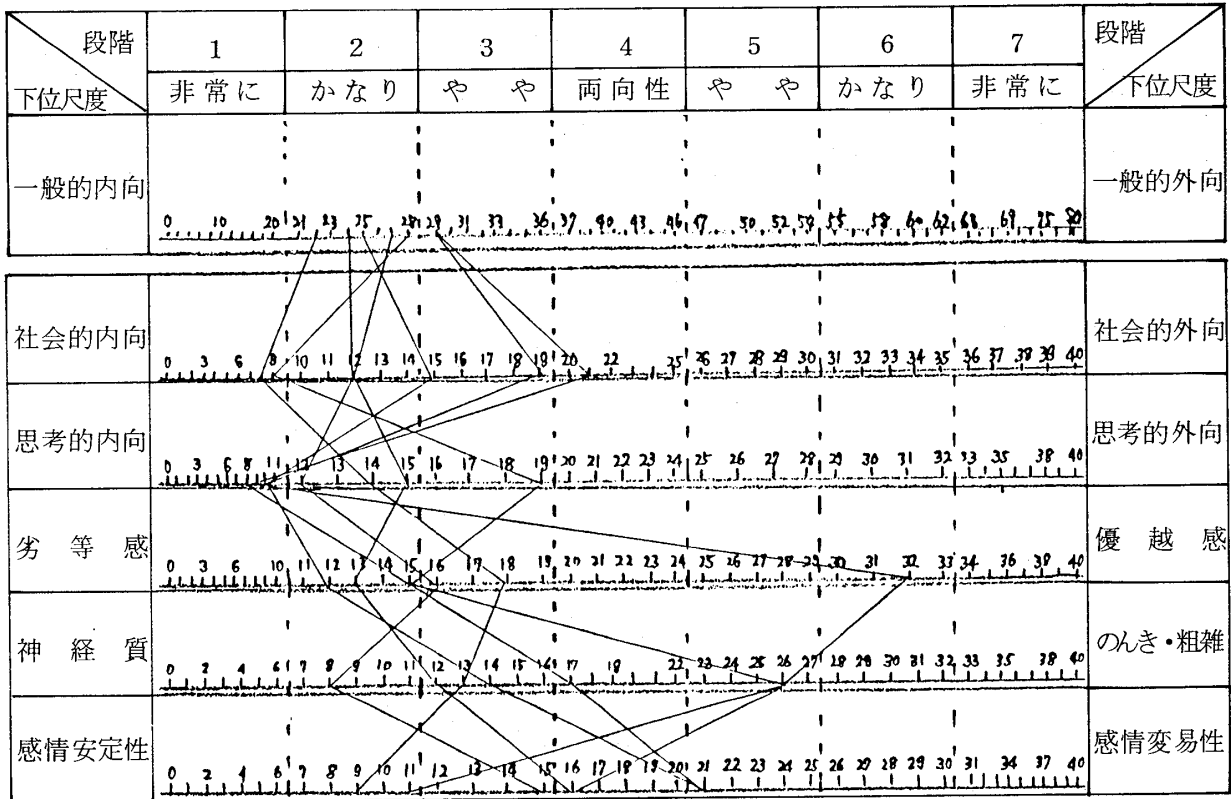
番号	テスト I+II	テスト I	テスト II	テスト III	テスト IV	テスト V	番号	テスト I+II	テスト I	テスト II	テスト III	テスト IV	テスト V
1	22	8	14	18	13	9	37	50	23	27	27	22	13
2	24	12	12	16	8	15	38	50	33	17	35	23	20
3	25	15	10	12	14	21	39	50	28	22	13	8	17
4	27	12	15	13	12	16	40	50	28	22	22	16	20
5	28	9	19	15	26	16	41	51	26	25	24	14	23
6	29	21	8	15	17	21	42	51	28	23	26	25	19
7	29	19	10	32	26	11	43	52	28	24	26	18	19
8	30	17	13	23	21	17	44	52	27	25	26	18	19
9	32	19	13	18	15	26	45	53	32	21	14	21	23
10	34	24	10	15	19	15	46	53	29	24	28	26	21
11	34	16	18	16	8	22	47	53	27	26	25	18	32
12	36	20	16	23	11	10	48	54	30	24	27	32	14
13	36	18	18	11	10	15	49	54	35	19	32	19	16
14	37	25	12	22	13	16	50	54	34	20	29	14	17
15	38	14	24	8	20	18	51	55	27	28	25	24	19
16	38	19	19	14	20	13	52	56	33	23	17	19	26
17	39	19	20	23	14	16	53	56	28	28	26	23	28
18	40	24	16	25	20	16	54	57	29	28	24	23	24
19	41	29	12	18	3	22	55	58	34	24	26	17	18
20	41	21	20	19	24	18	56	58	36	22	20	18	31
21	41	27	14	19	26	28	57	58	27	31	23	27	23
22	41	20	21	24	25	19	58	58	31	27	18	18	27
23	41	20	21	21	26	23	59	59	32	27	25	10	24
24	43	26	17	22	15	17	60	60	31	29	27	24	26
25	45	32	13	27	26	8	61	60	30	30	23	23	22
26	45	21	24	18	30	18	62	61	32	29	21	28	27
27	46	21	25	15	16	17	63	61	34	27	28	22	16
28	46	21	25	25	19	10	64	61	36	25	22	12	19
29	47	25	22	23	18	23	65	62	31	31	29	25	26
30	47	16	31	20	20	18	66	62	29	33	30	25	18
31	48	31	17	13	15	27	67	63	33	30	25	18	19
32	48	25	23	27	20	18	68	63	33	30	25	25	19
33	49	21	28	23	18	22	69	66	34	32	27	19	32
34	49	25	24	30	28	20	計	1959	1033	871	828	696	747
35	49	29	20	24	25	27	平均	47.2	25.4	21.8	22.0	19.4	19.9
36	49	23	26	14	21	22							

資料Ⅱ 下位検査Ⅰ+Ⅱの合計(一般向性粗点)

粗点	人数	粗点	人数	粗点	人数	粗点	人数	粗点	人数	
22	1人	30	1人	40	1人	50	4人	60	2人	
24	1人	32	1人	41	5人	51	2人	61	3人	
25	1人	34	2人	43	1人	52	2人	62	2人	
27	1人	36	2人	45	2人	53	3人	63	2人	
28	1人	37	1人	46	2人	54	3人	66	1人	
29	2人	38	2人	47	2人	55	1人			
		39	1人	48	2人	56	2人			
				49	4人	57	1人			
						58	4人			
						59	1人			
計	20点台	7人	30点台	10人	40点台	19人	50点台	23人	60点台	10人
%		10.1%		14.5%		27.5%		33.3%		14.5%

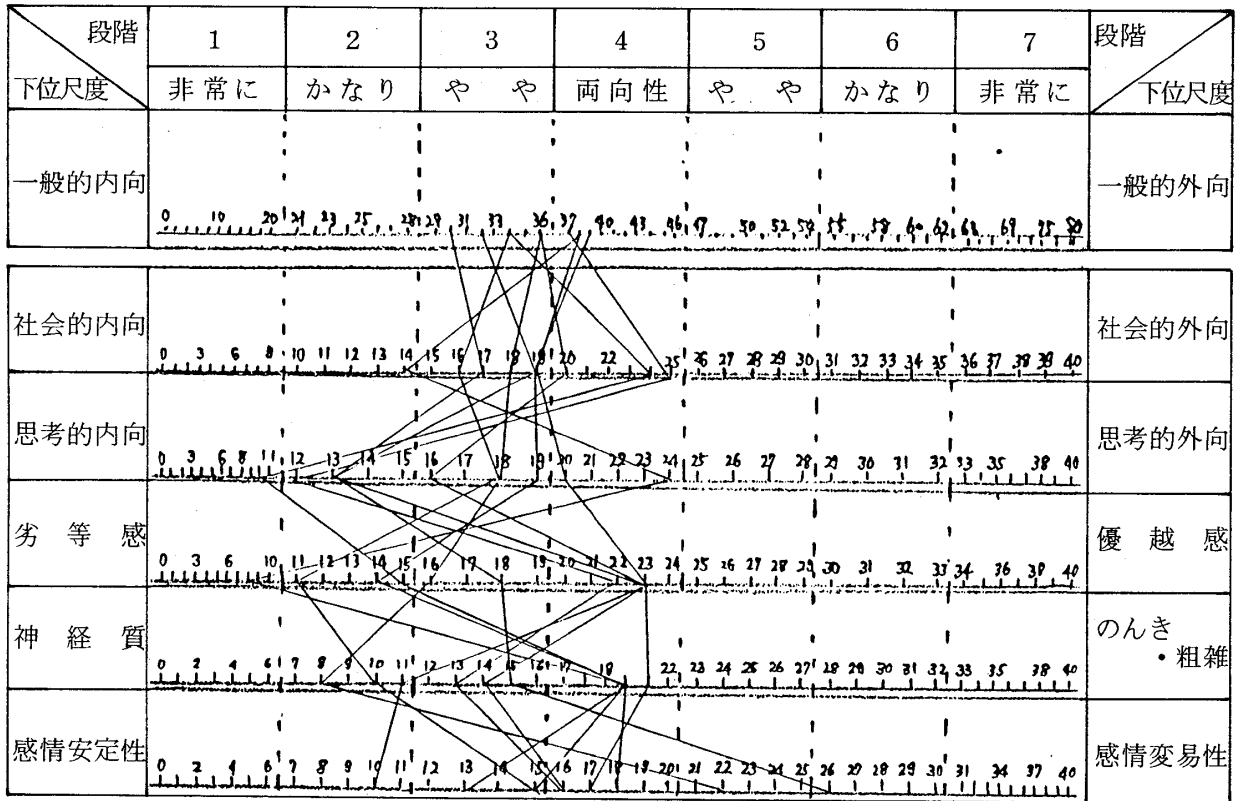
資料Ⅲ-1 VAT診断プロフィール

20点台



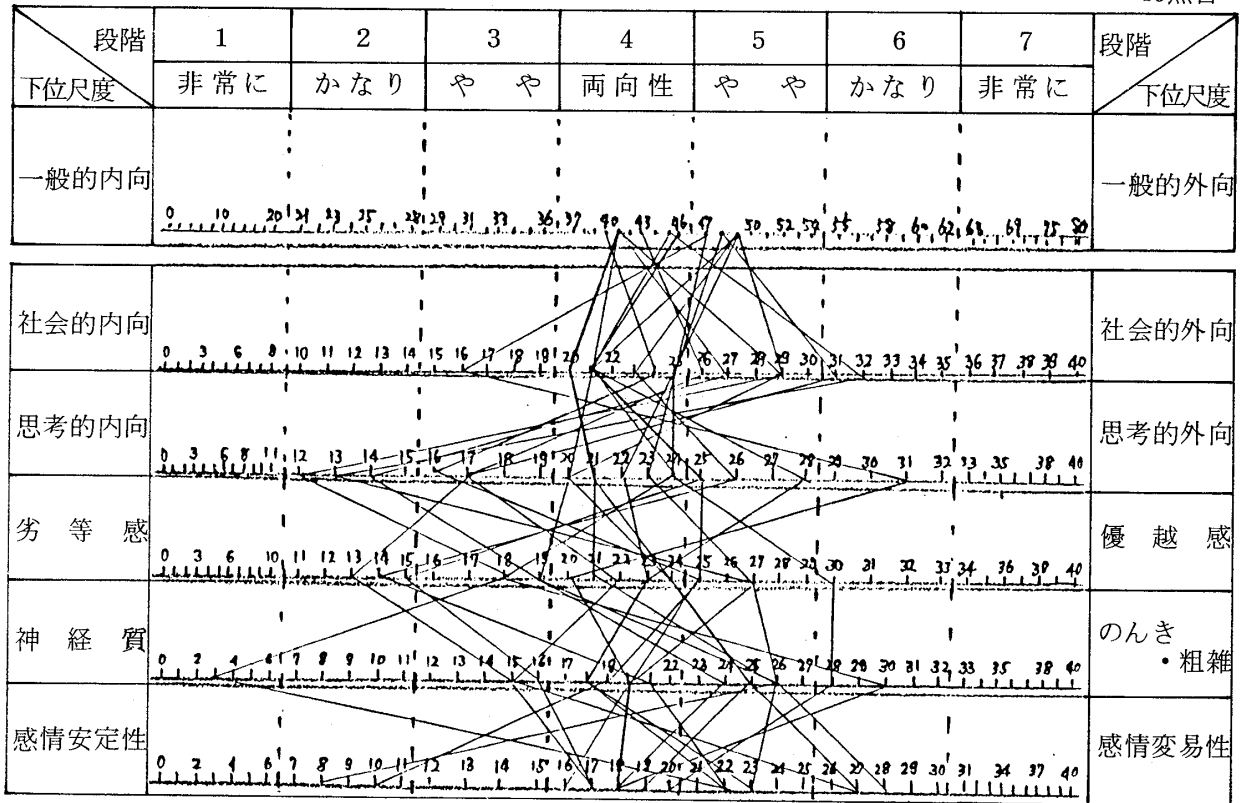
資料Ⅲ-2 VAT診断プロフィール

30点台



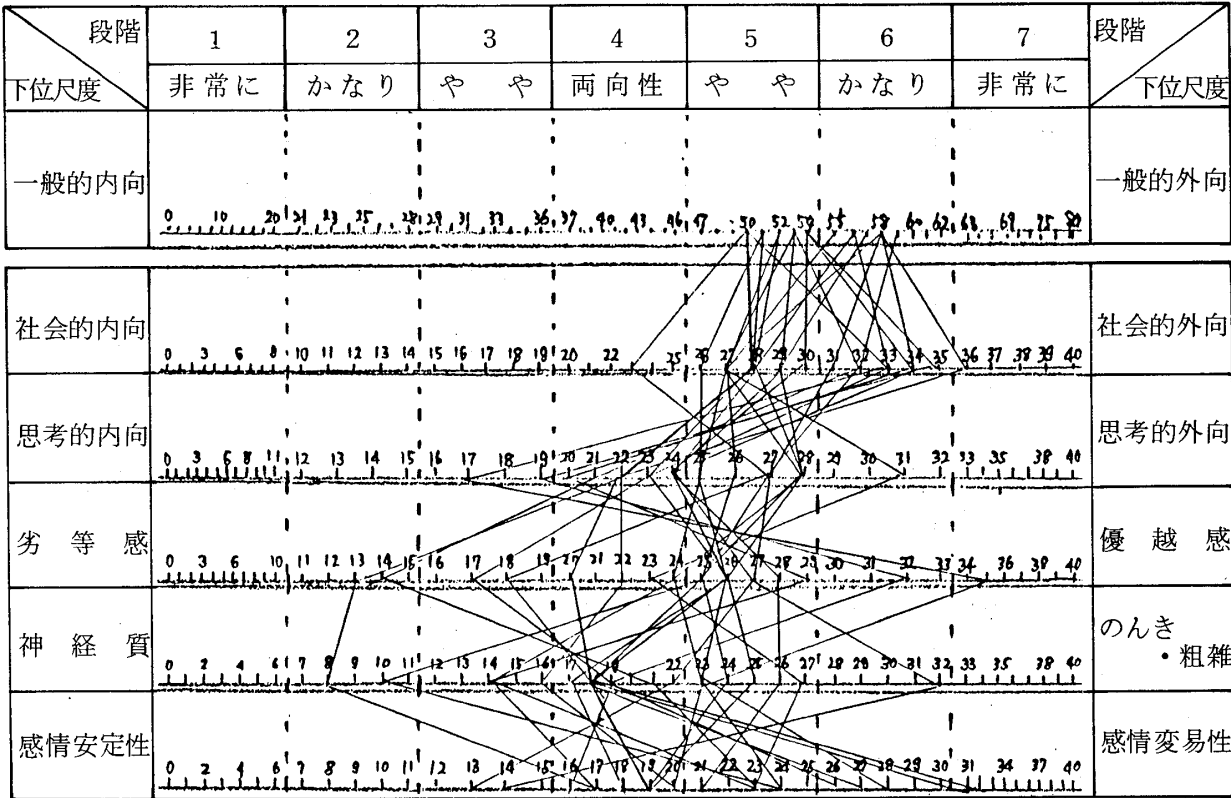
資料Ⅲ-3 VAT診断プロフィール

40点台



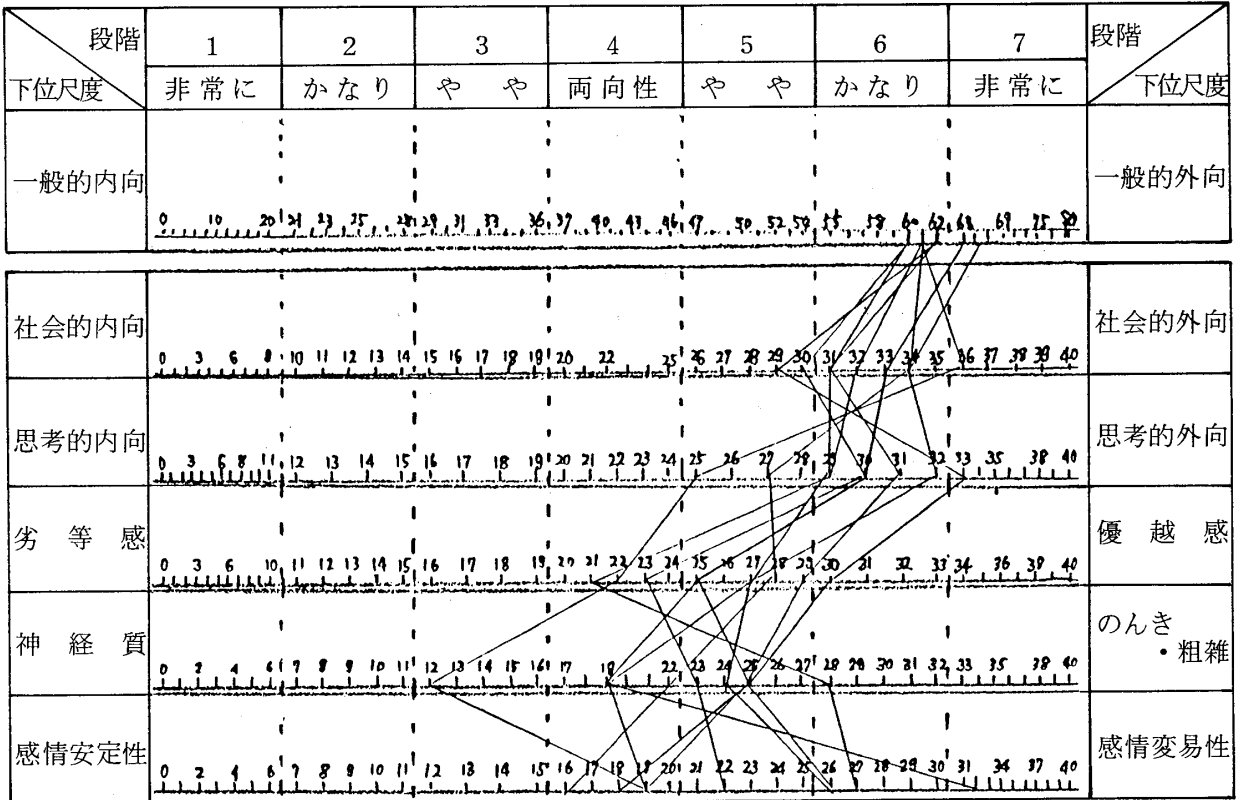
資料Ⅲ-4 VAT診断プロフィール

50点台



資料Ⅲ-5 VAT診断プロフィール

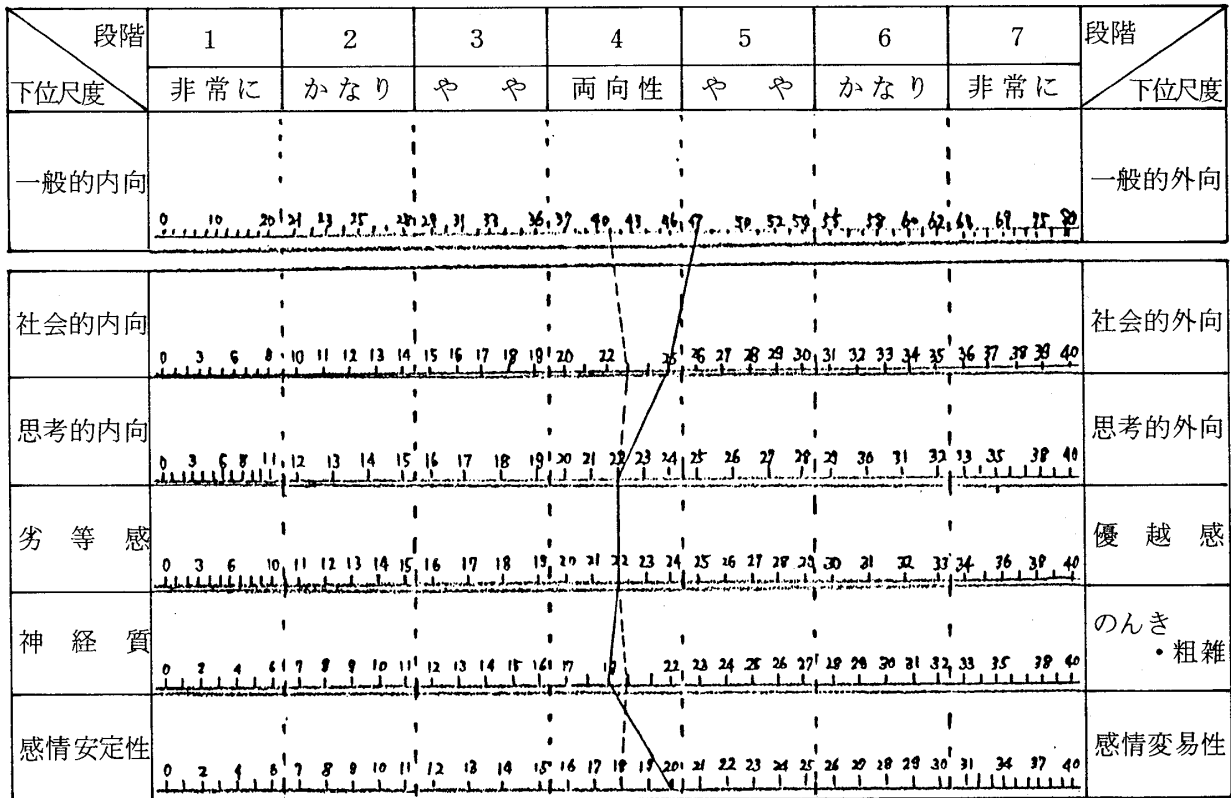
60点台



資料Ⅳ 得点群と人数分布

段階	1			2			3			4			5			6			7																							
	非常に内向			かなり内向			やや内向			両向性			やや外向			かなり外向			非常に外向																							
評語	20	30	40	50	60		20	30	40	50	60		20	30	40	50	60		20	30	40	50	60		20	30	40	50	60													
因子特性/得点代																																										
一般的内向							5						4	11					8	14								9	7		3											
社会的内向	2						2	1					1	2	12	1			1	4	13	2			2	8	7				1	1										
思考的内向	3	1					3	3	3				2	8	11				4	9	2				1	1	7				1											
劣等感	1						4	3	3	2			4	7	5	3			4	12	6	1			1	2	1															
神経質	1						1	3	2				1	4	7	9	3		6	7	5				2	1	1															
感情安定性							2	1	2				2	4	9	10	5		2	5	7	1			3	2	3										2	1				
総合計	6	2					17	11	8	4			11	24	11	10	1		4	31	62	16	1		9	23	26				3	6										
段階別合計	8			40			57			125			116			59			9																							
	414																																									

資料V VAT診断プロフィール



— 学生 … 一般成人

3. 考 察

(1) 一般成人との比較

素点集計の結果から、一般的向性の平均47.2が示すように、7段階評価のやや外向性が本学学生の向性傾向であった。さらに、一般成人の平均と比較することで大きな特性傾向がみられるのではないかと考え、標準化実験における成人の平均と本学学生の平均を検討してみた。

(資料V参照)

筆者は体育大生の特色は一般に比べて大いに外向性ではないかと予想していたが、平均的に殆んど差はなく、思考的内・外向性と劣等感・優越感が同点であり、本学学生は一般的内・外向と感情安定性・変易性の得点がやや上まわり、神経質の得点がわずかに少ないことがわかる。

一般にいわれるように、スポーツ人に多くみられる大胆にして繊細の様相といえなくもない。しかし、このプロフィールでみる限り一般成人との差違は認められず、両向性とやや外向の2つの段階評価に集中していることから安定した向性を示すものとみて差し支えないと思われる。

(2) 各得点群の特徴と段階評価の広がり

まずVAT診断プロフィールの20点台をみると一般的内・外向がかなり内向の方へ集中している。しかし、下位検査の社会的内向が非常に内向から両向性までの得点の広がりがみられ、思考的内向も非常に内向からやや内向までの得点巾がみられ、劣等感・優越感に於いては、得点巾がかなり劣等感からかなり優越感と5段階にわたる広がりを示している。個人の内包する複雑さを表わしていることがうかがえる。

30点台は一般的内・外向性が、やや内向と両向性に表われ、下位検査の得点巾もさほど広が

りがみられない。ただ、感情安定性・感情変易性に於いて、かなり安定性からわずかな点差でかなり変易性へと5段階にわたっているものの殆んど、やや変易性とみて差し支えなく、20点台の場合ほど個人の極端な巾はみられない。

40点台、50点台は人数も多く、複雑な図柄をみせているが、一般的内・外向性の集中が40点台は両向性とやや外向、50点台がやや外向とかなり外向にまとまっているだけで下位検査の図柄も近似している。個人の得点巾の広がり、40点台に於いて非常に神経質からかなりののんびり・粗雑と6段階にまたがり、50点台では、かなり劣等感から、非常に優越感が同じく6段階までの巾をみせている。これは先にも述べたように、個人のもつ特性であって、外面的にみられる向性のみの判断が如何に危険であることを示唆するものである。

60点台は一般的内・外向が、かなり外向、非常に外向に集中し、丁度20点台と反対の図柄がみられる。下位検査においては、わずかにやや神経質の得点者がいるが、4段階への広がりしかみられず、割合まとまった傾向を呈している。

以上のことから、各得点台の一般的内・外向の尺度としてのまとまりがあっても、下位検査における個人の持ち味の相違をいくらかみることができた。

(3) 各得点群と人数分布

点群の分布と段階評価での人数の分散を資料Ⅳからみた。

非常に内向と診断される者が、20点台と30点台に分布し、計8名である。次に、かなり内向は20～50点台に分散し計40名で、やや内向は20～60点台全体に表われ計57名である。両向性は125名と多数を占めるが特に20点台が4名と少ないのが目立った。やや外向では、両向性に次いで116名と多数であるが、30点台の3名が一番少なく、50点台62名と最大の集中をみせている。これは、先にみたテストⅠ＋Ⅱの合計点50点台23名の多くが各検査を通して、やや外向であることを示すものである。また、かなり外向は59名で、やや内向の57名と差はないが50点台、60点台が殆んどである。特色は、30点台に1名もいないという点である。これは、テストⅠ＋Ⅱの合計点30点台10名が、各検査項目で両向性から内向の方向へ高い得点をしていることになづけることである。次に、非常に外向では、20～40点代は0名で、50点台・60点台のみに表われている。

このように人数の分散、集中からわかるように、各得点群の傾向は個人的広がりを包含しながらも、一般的向性の得点の多少がそのまま内向から外向へと水平移行しているのがわかる。

この表から一般的向性だけを抽出してみると両向性の40点台11名(57.9%)とやや外向の50点台14名(60%)が群を抜いている。その結果が、先にも触れたように一般成人との比較で、やや外向と特徴づけた要因と考えられる。

(4) 全体的傾向の抽出

被験者の総体的傾向を抽出すると一般的向性が、やや外向であることが示唆する通り、社会的向性尺度に於いても、両向性とやや外向に集中して、陽気・ほがらか・協調的・積極的・派手・能弁・環境への順応・他人と一緒にの方が能率が上がる・ゆったりとして動作がなだらか、などの因子特性がうかがえる。また、思考的向性尺度では、両向性の数値が最も多く、次いで、やや外向であり、強気・積極的・のんびり・現実的・実行型・楽観的・発展的・順応性強し、などの因子特性の傾向がみられた。

Ⅲ. 思考力診断検査の結果

1. 思考力診断検査について

この検査では、検査手引きによれば、思考力を定義するのは困難としながらも「問題解決を可能にしている知的機能を総体的にとらえて思考力と呼ぶ」とある。つまり、思考力は種々な側面に現れる総合的な知的能力とみなされ、環境からくる情報の受け止め方、その情報の活用、得られた情報に対する姿勢、その情報を出発点として複雑、雑多な情報を整理し、秩序づける力、目標との関連性、必要性を弁別する力、これらの活動を持続する力などが思考力を形成し、多次元の構造をもつものとされている。

従って、この検査は思考力を4方向から捉えて、認知型検査、流動型検査、論理的思考検査、問題解決能力検査とで構成されている。

認知型検査	テスト	Ⅱ
流動型検査	テスト	Ⅳ
論理的思考能力検査	テスト	Ⅰ
問題解決能力検査	テスト	Ⅲ

以下、各検査について、検査手引きからの引用もしくは要約を記すこととする。

認知型検査は、環境からの情報をどのように受けとめ処理するかを診断する検査である。与えられた情報の中からどのような特徴を発見して、それに基づいて思考を進めるかという過程は思考力を示す大切な手がかりとされている。図形を類同視するに当たって、大まかな全体的印象からすぐ反応する直観型と図形の細部の構成要素の異同に注目する分析型を両極とするものの能力的水準の高低を示すものではなく、情報処理の仕方、つまり認知のタイプを示すものである。

流動型検査は、与えられた情報に関連させて、新しい情報を引き出すことができるかを診断する検査である。つまり、情報処理に当たっての発想の豊かさ、思考の柔軟性などの思考過程の進展の仕方のタイプをみるものである。

論理的思考能力検査は、命題の論理操作と記号操作とを通して論理的に思考を進めていく能力を診断するとされている。

問題解決能力検査は、複雑な問題状況を与え、その中から必要情報を選択し、関係構造を把握理解し、解決へと思考する総合的な能力を診断するものである。

2. 検査集計と結果

検査有効人数73名で、テストⅠからⅣまでの全ての粗点及び換算点の集計結果を一覧表にまとめ、資料Ⅵとした。この表はテストⅡ、Ⅳは粗点のまま示し、テストⅠ、Ⅲと総合は粗点、偏差値、換算による段階評定点が並列されている。番号は思考力総合の偏差値の低い者から順に縦に記載した。また、思考力総合はテストⅠ、Ⅲの総合した偏差値を求めたものである。

次に、この一覧表に基づき、認知型テストⅡ、流動型テストⅢは、粗点を5段階評定に区分し、該当人数及び全体の何%に当たるかをまとめた。論理的思考力テストⅠ、問題解決能力テ

資料Ⅶ 換算点による該当人数

認知型 テストⅡ	粗点	0～3	4～6	7～10	11～13	14～20
	段階評定	直観型	やや直観型	混合型	やや分析型	分析型
	人数	4 5.5%	28 38.4%	30 41.1%	9 12.3%	2 2.7%
流動型 テストⅣ	段階点	1	2	3	4	5
	粗点	4～6	7～9	10～12	13～15	16～20
	段階評定	非流動型	やや非流動型	中間型	やや流動型	流動型
	人数	1 1.4%	2 2.7%	17 23.3%	38 52.1%	15 20.5%
論理的思考力 テストⅠ	段階点	1	2	3	4	5
	偏差値	34以下	35～44	45～54	55～64	65以上
	段階評定	弱い	やや弱い	普通	やや強い	強い
	人数	1 1.4%	12 16.4%	24 32.9%	27 37.0%	9 12.3%
問題解決能力 テストⅢ	段階点	1	2	3	4	5
	偏差値	34以下	35～44	45～54	55～64	65以上
	段階評定	弱い	やや弱い	普通	やや強い	強い
	人数	10 13.7%	34 46.6%	22 30.1%	7 9.6%	0
思考力総合偏差地 テストⅠ+Ⅲ	段階点	1	2	3	4	5
	偏差値	34以下	35～44	45～54	55～64	65以上
	段階評定	弱い	やや弱い	普通	やや強い	強い
	人数	7 9.6%	16 21.9%	36 49.3%	12 16.4%	2 2.7%

テストⅢ及び思考力総合偏差地テストⅠ+Ⅲはいずれも粗点からそれぞれの偏差値を求め5段階評定に区分し、該当人数や%は、テストⅡ、Ⅳと同様の処理をした。

それらを各テスト毎に並べて一覧表にしたのが資料Ⅶである。

3. 考 察

(1) 認知型

換算点による被験者の総得点は535点、平均7.3であった。最低点は1点、最高点16点でいずれも1名ずつである。得点が平均以上の者は28名であり、得点が平均以下の者は45名であった。(資料Ⅵ参照)

また、段階評定の面で見ると粗点0～3、直観型4名(5.5%)、粗点4～6、やや直観型28名(38.4%)、粗点7～10、混合型30名(41.1%)、粗点11～13、やや分析型9名(12.3%)、粗点14～20、分析型2名(2.7%)であった。やや直観型と混合型が79.5%と約8割を占めて

いる。

次いで、やや分析型の12.3%であった。検査診断によれば、やや直観型は直観型より部分の構造にも眼がとどく余裕があり、やや分析型は分析型よりも直観の印象を考慮に入れている。また、混合型はまさしく混合であって、直観と分析の両面をあわせもつ中庸で融通性と余裕をもつとされている。従って、本学学生の傾向は、部分的な観察眼をもち直観の印象も大切に、中庸で融通性のある者が多いといえる。

(2) 流動型

換算点による被験者の総得点 996 点、平均13.6であった。最低点は4点、最高点は19点でそれぞれ1名ずつである。得点が平均以上の者は42名であり、平均以下の得点者は31名であった。段階評定の面からみると、粗点4～6、非流動型1名(1.4%)、粗点7～9、やや非流動型2名(2.7%)、粗点10～12、中間型17名(23.3%)、粗点13～15、やや流動型38名(52.1%)、粗点16～20、流動型15名(20.5%)という結果であった。最も多いのは、やや流動型で、次いで中間型、流動型とこれら3タイプで95.9%を占めている。

検査診断によれば、非流動型は固執的傾向が強く、視点の転換が困難であり思考の発展性に乏しいタイプとされている。また、流動型は思考が柔軟で発想の豊かさ、創造性が期待されるとある。他の3つの型(やや非流動、中間、やや流動)はこの両者の傾向の中間にあたり、流動型への移行が望ましいといわれている。

従って、本学学生の傾向は、得点からみて中間型から、やや流動型、流動型との3タイプに集中していることから、多角的視点からの処理や転換などの思考の柔軟性をもつ者が多いといえよう。

(3) 論理的思考力

この検査は、粗点を偏差値に換算し、さらにそれを段階評定するもので、相対評価である。その結果、偏差値34以下1名、65以上9名であった。その9名の内訳は、偏差値65が6名、67が1名、69が1名、73が1名となっている。(資料Ⅶ参照)

以下、偏差値と段階評定及び人数を示すと、偏差値34以下、弱い1名(1.4%)、35～44、やや弱い、12名(16.4%)、45～54、普通、24名(32.9%)、55～64、やや強い、27名(37.0%)となった。最も多いのは、段階評定に於ける、やや強い37%、次いで普通32.9%、やや弱い16.4%とこの3タイプに集中している。

以上を検査診断と照合すると偏差値50を平均的な論理的思考力を示すものとして、段階評定、普通・やや強い・強いが全体の81.7%を占めることから、論理操作・記録操作を通して論理的に推理する力をもつ者が多いことがわかる。

(4) 問題解決能力

この検査も粗点から偏差値に換算し、段階評定した相対評価である。その結果、偏差値34以下10名、65以上は0名であった。34以下10名の内訳は、偏差値21が1名、24が1名、26が2名、34が6名となっている。

以下偏差値と段階評定及び人数を示すと、偏差値34以下、弱い、10名(13.7%)、35～44、やや弱い、34名(46.6%)、45～54、普通、22名(30.1%)、55～64、やや強い7名(9.6%)となった。最も多いのは、段階評定に於ける、やや弱い46.6%で、次の普通30.1%、弱い13.7

%とこれらの3タイプに集中している。

以上を検査診断により検討すると、相対評価が、50を中心に多数の者が下位を占め、複雑な問題状況に対しての必要情報の選択、問題事態の関係構造の把握や理解から、解決へと思考を進める能力が劣ると判断されよう。

(5) 思考力総合偏差値

これは、論理的思考力と問題解決能力がともに、思考力を量的に測定するものであるところから、この両能力の組み合わせの状況から、診断する指標として算出されたものである。本学学生の結果でみると、論理的思考力が、普通、やや強い、強いに分布しているのに対して、問題解決能力は、やや弱いが多数占めており、このことから、思考力の多様性をみることができる。従って、思考力総合偏差値の意味もうなづける。

以下偏差値・段階評定と人数を示すと、偏差値34以下、弱い、7名(9.6%)、35~44、やや弱い、16名(21.9%)、45~54、普通、36名(49.3%)、55~64、やや強い、12名(16.4%)、65以上、強い、2名(2.7%)の結果であった。

思考力総合において、普通と、やや弱いで71.0%を占めていることから、全体の傾向としては、思考力は普通とするのが妥当と思われる。

IV. お わ り に

人が創造活動に携わるとき、イメージや想像力の豊かさが、独自の着想を生み出す根本であり、イメージや想像力は、豊かな感受性と思考の柔軟性に支えられている。これらは全て、創造の基盤と思われる。そこで、前回の研究に引きつづき、幼児体験調査の被験者と同じ被験者の中から、今回は4年次ダンス受講者73名を抽出して、TK式向性検査第二形式(VAT)とTK式思考力診断検査を実施した。このVATは、個人のもつパーソナリティを向性の面を中心に、多面的・診断的にとらえようとするものである。人間の行動や判断の基礎には、心的エネルギーの総体または、一種のリビドーと呼ばれるものがあり、そのエネルギーの向かう方向により、各人のパーソナリティ特性が定まるとされている。一方、思考力診断検査は、ストレートに思考力の多次元的な構造を明かす検査で、本研究の目的上、重要な個人資料の充実が得られるものと考えた。

これらの検査結果から、被験者全体の傾向として、個人の内面は複雑な様相を孕みながらも、各因子特性に於いて、両向性からやや外向の向性を示した。つまり、陽気、協調的、積極的、環境への順応、強気、現実的、楽観的などと言える。一方、思考力については、認知型に於いて、細部へも眼を向け、直観の印象も大切にし、中庸で融通性のあるものが多く、多角的な視点から、ものごとの処理や転換するなどの柔軟性もみられ、かなり流動的な思考をするものが多い。論理的に推理する力ももち合わせてはいるが、複雑な問題解決へ思考を進める能力に劣る。

思考力を総合的にみた、総合偏差値からの診断によれば、思考力は普通とするのが妥当のようである。

本稿では、各種検査結果と被験者全体の傾向を抽出するに止めたが、今後各種データのフ

ファイルから、個人に焦点をあて、研究を進めていきたいと思っている。

< 引用及び参考文献 >

- 1) 田川典子・林真幾子, 「イメージ発想に関する研究(1)」 東京女子体育大学紀要, 第17号, 1982. 3.
- 2) 恩田彰(編) 「創造性の開発と評価」 1968, 明治図書.
- 3) " 「創造性の基礎理論」 1967, 明治図書.
- 4) 田中教育研究編 「TK式向性検査第Ⅱ形式 … 手引」 1966, 田研出版KK.
- 5) 田中教育研究編 「思考力診断検査手引」 1974, 田研出版KK.
- 6) L. クラーゲル, 千谷七郎訳 「意識の本質について」 1979, 勁草書房.

A Study of Image Expression (Part 2)

Tsuneko Tagawa

When a person is involved in creative activities, the image or fertile imagination are the basis for producing the original idea which are based on rich sensitivity and flexible thinking. These seem to be the fundamentals of creativity. As a succession of previous study, seventy-three senior college students taking dance class were chosen out of the same subjects who were examined in the previous survey of infant experience. They took the second type of TK Extroversion Introversion Test (VAT) and TK Thinking Diagnostic Test.

As a general tendency, these tests resulted in an ambivert type slightly near the extrovert type in each factor characteristics, though internal aspects of subjects indicate a complicated phase. It denotes cheerful, cooperative, active, adjustable, bullish, realistic, and optimistic characteristics. On the other hand, as for thinking ability, many moderate and adaptable tendencies in the cognitive level were observed. Circulative thinking as well as the flexibility to deal with and convert things multilaterally were often observed. In addition, the ability to reason logically was superior but lacked the ability to solve complicated problems. According to the result of total deviation which comprehensively consider thinking ability, it seemed to be reasonable to judge the thinking ability as an average. This study was limited in showing the results of each tests and drawing general tendency of the subjects. Further study will focus on the individuals based on the data file.